

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成27年10月21日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 人間・環境学研究科

職 名・学 年 研究員

氏 名 江 頭 幸 士 郎

助成の種類	平成27年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研究集会名	熱帯林研究の最前線:サラワク森林局と日本サラワク森林研究コンソーシアムの共同プロジェクト促進		
発表題目	JRCTSおよびサラワク森林局によるサラワク産両生類に関する 最近の系統分類的研究の紹介		
開催場所	マレーシア・サラワク州・クチン市・帝国ホテル		
渡航期間	平成27年 9月20日 ~ 平成27年 9月24日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000 円	
	使用した助成金額	200,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳	往復渡航費(航空運賃等):140,000円	
		現地滞在費・日当:60,000円	
大会参加費:0円			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 研究助成金の交付手続きや会計処理等が煩雑化の一途を辿っている昨今において、貴財団の助成は諸手続きが簡素で、非常に扱いやすい貴重なものだと思います。またお世話になることがありましたらよろしく願いいたします。		

成果の概要／江頭幸士郎



サラワク州森林局（日本の林野省と環境省に相当）と日本サラワク森林研究コンソーシアムの共催する表題の国際シンポジウムは、2015年9月21・22日にかけて、マレーシア領ボルネオサラワク州都クチンにおいて開かれた（写真）。当シンポジウムは、特に同州のランビルヒルズ国立公園を中心にサラワク州との共同研究を長年続けてきた研究者チーム（日本人研究者が中心）のこれまでの研究成果の紹介・総括と、それらを受けて今後より一層のサラワク-日本（あるいは他国）間共同研究の活性化を目的として開催されたものである。

ランビルヒルズ国立公園は、南米大陸のアマゾン川流域西部と並んで世界で1・2位を争うほど植物の多様性が高い地域であり、それを取り巻く動物・菌など豊富な、マレーシアでも有数の国立公園である。特に、植物と昆虫との相互作用に主眼を置いた大規模かつ長期的な生態学的研究が有名であるが、それ以外でも多様な対象生物・分野を扱った研究が活発に行われている、まさに森林研究の最前線である。

シンポジウムは Tuan Haji Sapuan Ahmad サラワク森林局長官と、コンソーシアム代表者の中静透 東北大学教授の挨拶に始まり、同じく中静教授の基調講演を含む21題の口頭発表がこれに続いた。口頭発表の内容としては、例えば直接的な人間活動以外の環境要因による森林の消長（例えば M. Mohizah 森林局職員の発表など）と、そうした変化の至近的要因（例えば、酒井章子 京都大学教授）といった、最もベーシックでありながらランビルヒルズ国立公園での研究を代表する森林動態を扱ったものから、人間の手の入った森林について同様の研究を行った例（P. A. Melang サラワク森林研究センター職員）、あるいはそうした森林動態とその結果生じる生物多様性について着目した時、なぜランビルやアマゾンのような熱帯多雨林でより多様性が高くなるのかといった究極要因・一般則の解明を目指した研究（L. K. Kho オックスフォード大学研究員）もみられた。またこの他、個別の生態学的トピックに着目した発表もみられた。例えば、ランビルでの研究により発展したと言ってもよいアリとアリ共生植物との共進化研究（清水かや 京都大学研究員）などである。こうした個別研究例の発表はポスターセッションに多く見られた。筆者も、これまでランビルを含むサラワク州各所で行ってきた両生類を対象とした調査・研究の成果報告として、近年筆者らが発見・記載した新種の紹介や、それらの進化的重要性について論じたポスターを出展した。

こうした純粋に学術的な研究の他、森林保全に関する発表もみられた。森林保全活動を行うためにはまず全体の植物層を大まかにでも把握する必要があるが、それを効率的かつ高解像で行うために空中撮影写真を用いるといった新手法紹介（A. Suhaili 森林局職員）や、周辺地域の市民を巻き込んでの森林保全活動の実践例の紹介（M. E. Wasli サラワク大学准教授）、森林再生に適した特徴をもつよう樹の品種改良を行った研究（W.-S. Ho サラワク大学教授）など、全体的に未だ手探りの段階にあるという印象は受けたものの多岐にわたる研究事例が紹介された。またポスター発表にも、全 17 件中 3 件と割合は高くないものの、こうした森林センサス・保全に関わる発表が含まれた。また、これらを含む発表全体の総括として総合討論・質疑応答の場も設けられ、森林局側からは学術研究についての問いかけ、研究者側からは共同研究のあり方についての提案などの意見が取り交わされ、盛況のうちに二日間のシンポジウムは幕を下ろした。

筆者にとって、このシンポジウムへの参加は、上で紹介した各発表により多くの知見を得られた他、サラワク側の職員・大学関係者と多く知り合えた点で有意義であった。これまで筆者は、現地での調査許可取得に関わる限られたスタッフとしか接点がなかったが、サラワクの森林研究に携わる人間が一手に集まった本シンポジウムに参加したことで、より幅広い人脈を得ることができ、将来の共同研究への足掛かりとすることができた。このことは、筆者のような経験・人脈の十分でない若手研究者にとっては非常に有益なことである。最後になったが、そのようなシンポジウムに参加する貴重な経験を筆者に与えてくれた公益財団法人京都大学教育研究振興財団に篤い感謝の意を示し、この報告文の結びとさせて頂く。